



第125回

東京2025デフリンピック

※2020年11月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

近代オリンピックの個人競技で女性初の金メダリストは、26歳の時に聴力を失った選手だった。1900年の第2回パリ五輪で、米国のシャーロット・クーパーが女子テニスを制した。その後、聴覚障害者が国際交流する競技大会の実施機運が高まり、24年に同じパリで開催された。「ろう者のオリンピック」と呼ばれる「デフリンピック」の始まりである▲それから約100年を経て「東京2025デフリンピック」の幕が開く。日本での開催は初。約80の国からおよそ3000人の選手が参加する。開会・閉会式を除き、全競技を予約なしで無料観戦できる。会場に実際に足を運んだり、動画中継を見てほしい▲アスリートの活躍を

支えるスタッフに約140人の手話の通訳を行う人たちがいる。手話は言語によって異なるため、大会では国際手話の通訳者と、日本手話言語の通訳者がペアで行動するのが基本だ。大会に向け、研修を重ねてきた▲応援に多くの人が参加できるよう、東京都などは手話や体の感覚をベースとして、数パターンの身振りを「サインエール」として考案した。多いに活用したい▲幸い、「拍手」を意味する手話は世界共通である。両手を上げ、手のひらをひらひらさせる。会場で観戦した際はぜひ、選手の健闘に手話で拍手を送ってほしい▲手話を言語として習い、使うため必要な環境の整備を定めた手話施策推進法が成立、制定された年

である。手話との距離を近づけることは、貴重なレガシーとなるに違いない。